



宇奈月温泉とけやき平を約90分で結ぶトロッコ電車

〈峡谷に架かる鉄～富山〉

鉄の絶景



富山市から臨む立山連峰。
アルペンルートは4月から11月が
シーズン

Steel Landscape.

黒部峡谷はかつては「秘境」という言葉がもっとも似合う場所であった。電力開発のために人が足を踏み入れてからまだ百年も経過していない。今回は富山県、峡谷を走るトロッコ電車と鉄橋にスポットを当てる。

山岳地帯を身近にした立山黒部アルペンルート

もし左党であれば、富山といってまず思い浮かべるのは清酒立山かも知れない。もとより富山湾は漁獲物の宝庫、天然の生けすといってもいい。ここで捕れる多種多様な魚……、ブリやズワイガニ、ホタルイカ、カキと列挙していくだけで、日本酒との相性のよい土地柄に思い及ぶ。

「立山」は北陸を代表する酒の銘柄である以前に、富山市から東方に大きく連なる山なみの総称だ。地図上に立山という名の山は存在せず、通常、立山といった場合、広い意味では立山連峰を指すこともあるが、たいていは立山三山（雄山、浄土山、別山）をいう。立山は昔から信仰登山の対象となっており、富士山、白山と並んで日本三霊山のひとつに数えられる名山だ。雄山の山頂には雄山神社が祭られていて、登山者はここをめざした。それで、狭義には雄山のみを立山と呼ぶこともある。

「立山黒部アルペンルート」によって、この立山も身近な存在となった。なにしろほとんど歩くことなく、乗り物を使い継いでいくだけで3,000m級の山岳地帯を訪れることができるのだ。このルートの富山側からの入り口は立山駅であり、そこまではローカル線（富山地方鉄道立山線）でいける。立山駅からケーブルカー、高原バスを使い継いだ時点で室堂

（標高2,450 m）に到着。ここは立山登山の起点となるところだ。さらに立山の内部をトンネルバスで通過し、ロープウェイ、ケーブルカーと乗り継いだところで黒部川第四発電所ダム、通称「くろよんダム」に到着する。ダムの前面から噴き出す水量にまず驚かされる。ダムの高さ、山岳の雄大な光景、そして轟々たる水音……、あまりのスケールに圧倒されてしまう。アルペンルート最大の見所といえるだろう。

ダムの上から水の流れを追ってみると、黒部川の激しい流れを挟んで深い峡谷がつづいている。この峡谷を走る列車に乗り忘れてはいけない。トロッコ電車の名前で親しまれている、黒部峡谷鉄道だ。



富山市の街並み



黒部川第二発電所に隣接する赤い橋、「目黒橋」は、昭和9年に完成している。発電所はその2年後に完成しており、72,000kwの出力は当時、東洋一といわれた。その後、峡谷鉄道の延長とともに、発電所の数も増していった

深い峡谷を刻んで進むトロッコ電車

富山市の市街地から眺めると、遠くに霞む巨大な山の壁が見わたせる。この東部山岳地帯は、ちょうど立山連峰と後立山連峰が二列に平行して走る形となっている。富山市から見えるのが立山連峰、その後ろに後立山連峰^{うしろたてやま}が走っている。この二つの山列の間を流れる川が、黒部川。深いV字の峡谷で知られる名勝地だ。随所に断崖や瀑布が見られ、まさに秘境と呼ぶに相応しい。

ここは冬の積雪がおびただしく、河川勾配も急であったため、かつてより水力発電を行なうには絶好の地とされていた。また風景に富み、温泉や木材、鉱物など、さまざまな資源にも恵まれていた。それでもなお人知れぬ秘境として長い間人の手が加えられなかったのは、地形や気象など、その自然環境のきびしさゆえであった。

現在、黒部峡谷の玄関口となっているのは、富山地方鉄道の終点、宇奈月温泉である。ここからトロッコ電車が発着している。この電車はもともと電力開発用の資材運搬を担うために敷設されたもので、大正末期に工事がはじめられ、宇奈月から峡谷を遡る20.1kmの全線が開通したのは昭和12年のこと。この長期にわたる工期を見ただけでも、難工事のほどが伺える。

誰も訪れたことのない地帯に足を踏み入れることのできる軌道の存在は、その後、広く知られることになり、遊覧希望

者は後を絶たなかった。電力会社もこれを断れず、寄付金という形で料金を取り、便乗証を発行して遊覧客を乗せた。この便乗証には「安全について一切保証いたしません」と明記されていたのだが、これがかえって秘境ムードを煽ることとなる。戦後に入っても人気は衰えず、昭和28年には地方路線として正式に営業が開始されることとなった。ちなみに現在黒部峡谷鉄道によって営業されている。

宇奈月を発車すると、オレンジ色の電気機関車に引かれた列車は、すぐにトンネルに入る、トンネル内は夏でもひんやりと心地よい冷たさだ。奥へ奥へと進んでいくにしたがって、覆い被さるような岩壁に出会い、鉄橋をわたり、急流を眼下に眺め、大小のダムを通り過ぎていく。樹木も豊富だ。トチ、ブナ、ヤマモミジ。峡谷には数々の鉄橋が架けられていて、それら緑と岩肌に映える景観をつくり出している。

わが国で最初の鉄の橋は、慶応4年(1868年)に長崎の中島川に架けられた「くろがね橋」。江戸末期から徐々に外国人居留地のある都市に現われた鉄の橋は、文明開化の象徴でもあった。ここ、黒部川の激しい流れをまたいで架かる鉄の橋もまた、文明のシンボルといえるのかも知れない。長い間、誰にも知られることのなかった秘境、神秘のベールに覆われた人跡未踏の地。大いなる自然に抱かれて走る……、この偉大な経験を得られることは、やはり一つの文明の勝利といえるのではないだろうか。